動物介在教育・療法学　基礎講座

第 2 回　受益者に関する知識

子どもの発達―環境との相互作用

子どもには，言葉や，人との関係など，生まれてから学ぶべきことがたくさんあります。言葉を覚える能力は生まれつき備わっていると考えられますが，その内容は経験によって変わってきます。日本語を聞いて育った子どもは日本語を話すようになり，英語を聞いて育てば英語を話すようになります。人の脳は生まれてからの経験を適切に吸収し，生きて行くうえで必要なプログラミングをすると考えられます。脳には特定の時期に効率よく学習できるような機能も組み込まれています。学習に適した時期を「感受性期」と言います。一般的に多くの感受性期は幼児期にあります。日本語を聞いて育った人が英語の R や L の発音を聞き分けるのが苦手なのは，感受性期をすぎてから学習するからと言えるでしょう。言葉の発達や人との関係性に関しては幼児期前半に，また運動発達に関しては体の作りがしっかりしてきた幼児期後半以降にピークがくる傾向があります。自転車の乗り方や，楽器の演奏は赤ちゃんには難しいですが，3 歳をすぎると可能になってきます。運転など，運動発達と冷静な状況判断が必要なものは思春期を過ぎてからが適しているようです。楽器や運動の多くが大人になってから始めるとなかなか上達しないのは，感受性期と関連しているからです。

動物についての学習もこのような感受性期があるかもしれません。エドワード・ウィルソンのバイオフィリアの考え方では，人は生まれつき身の回りの生命体に関心を持つと考えられます（Kellert & Wilson）。おそらくどのような生き物にどう反応するかは，経験によって異なるでしょう（写真 1，2）。サバンナで遠くにいる動物を見つける力，何百頭といる羊の個体識別，牛にぶつからないように車を運転する，天候によって魚の動きを予測するなどは，幼い頃からの日々の経験や周囲の教育によって熟達していくものであり，大人になって初めて出会って簡単にできる物ではありません。

人のもう一つの特徴として，大人世代が子ども世代にいろいろと教えることが挙げられます。人は先祖が獲得した技術や能力を効率よく子ども世代に伝えることで，他の動物に比べ大きく変化してきました。21 世紀に生まれた子どもたちは，20 世紀に生きた人たちが試行錯誤して作り上げたコンピューターや携帯電話を幼い頃から使いこなします。他の動物の場合は，試行錯誤して獲得した技術は一代限りのもので，次の世代はまた最初から試行錯誤しなければなりません。人の場合は，道具の操作や物の考え方（例えば数の概念など）はこのように，確実に前進した形で次の世代に受け継がれます。

冒頭で触れた言葉や対人関係の在り方，運動や楽器の演奏などは直接的な経験の積み重ねが不可欠です。動物とのやり取りもこういった経験が重要な学習の一つで，ゆるやかな感受性期があると考えられます。

動物に関する経験は 21 世紀の日本では生き死に関わるものではないかもしれません。しかし，今でも地球上の多くの地域では大切なものです。人間の歴史を振り返れば分かりやすいですが，人にとって動物に関する知識は生きるために必要なものでした。狩りや釣り，動物から身を守る方法，家畜を管理する方法について子どもは幼い頃に集中して学ぶのに適したプログラムを持って生まれると言えます。

自然の中で見なれない植物や動物を見ると，それが

写真 1　動物との関係は文化によって異なります（インド）

写真 2　モンゴル

食べられるかが気になることがあります。特に子どもはその傾向が強いように思われます。石垣島の浜辺でアダンの実を見たとき，それがパイナップルに似ており，果たして食べられるのか否かが話題になったことがあります。食べられるものなら，試してみたい，しかもこんなところにひっそりと実をつけているといったことで，一気に盛り上がりました。一方で，知らないものは危ないという意見もでました。きのこ狩りで毒キノコをめぐってのやりとりとも似ています。子どもの頃にツツジの蜜を吸ったことのある人もいるでしょう。子どもたちはツツジの蜜のことを誰かに教わり，その情報はあっという間に広がって行きます。特に空腹でも，食料に困っているわけでもないのに自然の中で見つけた食料・食料もどきにここまでひきつけられるのはなぜなのでしょうか。

海や川の生き物に関しても似たようなことがあります。穴の奥に獲物がひそんでいると思ったり，食べられそうだとなると，子どもは必死になって捕獲を試みます。たとえ結果は不本意な物であっても，子どもは何かに駆り立てられるように穴を掘ったり，追いかけたりします。市販のものに比べ釣った魚や見つけた野菜や果物は見かけは良くなかったり，味が劣っても食べる喜びは大きいようです。

このような行動は，経験の積み重ねにより洗練され，大人になるときのこ狩りの名人や狩人や，漁師として自立に関連すると考えられます。子どもの中には昆虫採取やどんぐり拾い，魚採りに夢中になる子がいますが，これは他の動物の子どもが狩りの練習をしているのと（仔猫がうごく物には何でもじゃれつくなど）共通しているともいえるでしょう。

慈しみに関してもさまざまな行動が幼い頃から見られます。それは子ども本人がのぞむだけでなく，周囲の大人がそういった環境を整えることも含めてです（写真 3，4，5，6）。赤ちゃんの布団や洋服，おもちゃについているさまざまな動物の絵，子ども向けの絵本の内容など，子どもは生まれたときからさまざまな動物のキャラクターに囲まれて育ちます。家にペットがいない環境でも，多くの子どもはぬいぐるみや絵本に登場する動物に強く惹かれています（Melson 2001）。

学びの機会を与えてくれる動物

日本でも子どもたちは動物から多くのことを日々学ぶことは可能です。春になり，近くの池にオタマジャクシを取りに行く子どもたち。いつの間にか，産卵の時期，卵のありそうな場所，オタマジャクシのいそうな場所を知っています。そっとすくい上げなければならないことも知っています。メダカを捕まえるのも，蝶を捕まえるのも，カブトムシを捕まえるのも同じです。動物がどこにいるのか，気づかれないように近づく方法などを体で覚えています。このような動物との駆け引きは子どもにとって大切な経験です。大人も率先して子どもたちに経験の場を与えています。都会で

写真 3　大人は子どもが動物と関わる機会を積極的に作ります（そして写真に残します！）

写真 4

写真 5

写真 6

も夏の夜には公園でカブトムシを探す親子を見かけます。タヌキがでるとなれば，目撃証言自慢話に花が咲きます。

ビオトープや学校飼育動物，伴侶動物も学びの機会を提供してくれます。ビオトープでは植物を植え，虫や池の生物を育てるには忍耐力や観察力が求められます。四季折々の変化は子どもたちに何かを続けることの大切さや喜びを教えてくれます。イヌやネコ，ウサギとのつきあいでは高度なコミュニケーションの技術が必要になります。相手がいやがることをすれば，近づくこともできない，あるいは相手が危害を加えてきます。一方で，信頼関係を築くことができれば，手からえさをとって食べたり，一緒に遊んだり，膝の上に乗ってきたり，帰りを待っていたりと子どもたちに多くの喜びを与えてくれます。家族の中で弱い立場にある子どもたちに自信を与えてくれる存在であり，また責任感や忍耐力を無理なく教えてくれる存在でもあります。人よりもライフサイクルの短い動物は子どもたちに生と死について考える機会を与えてくれます。周囲の大人がその扱いの模範を示すことで子どもは多くを学ぶことでしょう。

また，実際に動物に触れる機会が少なくても，絵本，テレビなどで動物に関心を持ち，慈しみの気持ちを覚える経験も役にたつでしょう。人には絵や写真，映像さらには文字をとおして多くのことを感じる能力があります。いろいろな方法で動物と接点をもち，関心を高め，慈しみの心を育てることが可能です。

参考文献

Beck, A. & Katcher (1983) Between Pets and People, Putnam, New York.

Kahn, P. & Kellert, S. eds (2002) Children and Nature, MIT Press, Mass.

Katcher, A. (2002) ‘Animals in Therapeutic Education’ in P. Khan & S. Kellert eds. Children and Nature, MIT Press, Mass. pp.179–194.

Kellert, S. & Wilson, E.O. eds (1993) Biophilia Hypothesis, Island Press, Washington D.C.

Melson, G. (2001) Why the Wild Things are ゲイル・F. メルスン（2007）『動物と子どもの関係学―発達心理からみた動物の意味』横山 章光，加藤 謙介　訳　ビイングネットプレス.

柿沼美紀（日本獣医生命科学大学）